

北海道警察本部交通部交通管制課

「交通管制センター」

「人と環境にやさしい都市交通」を テーマに、的確な交通情報を提供 し続ける。

●全国随一の最新鋭の設備が24時間稼働

この冬、日本は長野オリンピックで大いにわきました。ちょうど26年前、アジアで初めての冬季オリンピックが札幌で開催されました。このオリンピックを契機に、昭和47年1月に北海道警察交通管制センターが設置されて運用をスタート。当時の全道の信号機数は1,729基、管制エリア信号機数は札幌で176基だったといえます。

平成8年1月には警察本部庁舎移転にともない、新交通管制センターが設置され、全国でも群を抜く最新鋭の設備を駆使して、歩行者やドライバーのニーズに応える交通情報を提供。コンピューターを24時間稼働させ、よりの確に情報を分析・処理しながら「人と環境にやさしい都市交通」をテーマに、歩行者等の安全確保、都市交通機能の確保などに努力しています。

さらに具体的に交通管制センターのシステムや役割をクローズアップしていくと、まず第一段階で最も重要になってくるのが交通情報の収集です。車両感知器や旅行時間計測装置、路面感知器等を使って交通量や走行速度を計測。このほか、パトカーやヘリコプター、

白バイ等からも交通障害や交通渋滞等の情報を収集しています。

集められた情報は、交通管制センターのコンピューターによって、分析・処理され、信号の秒数や複数の信号機の表示のタイミングなどを制御するために使います。ほとんどが自動的に行われますが、状況によっては渋滞を解消するために管制官が信号機を直接制御することもあるそうです。

また、コンピューターから5分ごとに出力された交通情報は、交通情報板や旅行時間情報板などに表示されるほか、AMラジオ（1620KHz）からも発信。また、隣接している日本道路交通情報センターでも、テレビやラジオの放送を通じてタイムリーな情報を提供しています。

●信号機のスペシャリストが集まる専門部署

こうした膨大な情報を表示する巨大パネルが交通管制センターに設置されていて、現在、どこがどんな状況にあるのかが手に取るように分かるようになっています。この様子は、年間約1万5千人も訪れるという



管制室

16階の見学者コーナーからも見ることができ、壁一面のデータはまさに圧巻です。北海道警察本部交通管制課の増山芳邦課長に、まずはこのパネルの仕組みから説明していただくことにしました。

「北海道は札幌のほか、函館、旭川、北見、釧路の5カ所に交通管制センターがあります。まずは札幌方面が管轄している地域のパネルを見てみましょう。ここでは、石狩、空知、後志、胆振、日高の約2万平方キロメートルのエリア内の交通情報を収集し、分析・処理した後それぞれの必要な場所に情報を提供しています。北海道の信号機は約11,000基ありますが、そのうちの約6,000基が札幌方面に集中。さらにその中の約1,800基は、ここのコンピューターから直接指令を出して青の時間を決めたり、信号機同士の連動を取ることができます。峠の状況や高速道路の速度規制、5分間の上り、下りの交通量もこのパネルで把握が可能です」

札幌市内の交通状況を細かく示す別のパネルは、例えば道路が赤で表示されていれば1キロメートル以上の渋滞、黄色になれば500メートル以上渋滞していることがわかります。雪の降った日の朝などは、特にあちこちに赤ランプがついて、職員の方たちは対応に大忙しなのだそうです。

また、主な交差点に設置されている監視カメラの映像からも、その時点での交通状況を知ることができるようになっています。

このほか信号機に関しては新たに設置する以外のことをすべてこの課で行っています。驚いたことに道内で年間約700台もの車が信号機にぶつかってくるのですが、信号機が壊れた場合の復旧対応もこの課の仕事。目の不自由な方のための音の出る信号機の設置や、古くなった信号機の更新、最近ではITSの整備も担当しています。いわば交通管制全般に関するスペシャリストが集まっている、信号機の専門部署といえそうです。

●渋滞を減らしてイライラを防止し、 環境にもやさしく

交通管制センターがあることで、様々な効果が期待できるといいます。特に、都市部の問題である交通渋滞を緩和する役割は大きなものです。

「渋滞を減らせばドライバーのイライラも防止できますから、事故の減少につながります。一方で、北海道はスピードの出し過ぎによる交通事故も多いのですが、ここではこのような事故を信号制御によって、できる限り抑止するといった努力もしています。さらに最近は停車中のアイドリングがエコロジーの観点から問題とされていますが、信号待ち時間をなるべく少なくすることが、少なからず地球にやさしい環境づくり

に役立つものと信じています。」

また、幹線道路のながれをスムーズにすることでドライバーが抜け道を探すこともなくなり、地域住民にとって安全な生活空間が確保されることも見逃せません。

もっとも北海道の交通事故死ワーストワンは増山課長にとっても頭の痛い問題です。若者の週末の夜間にかけての暴走運転が引き金となる事故が跡を絶ちません。「毎年交通事故で多くの方の命が失われていることを、もっと若い方が意識するようになってほしい」と言葉を強めます。

北海道に来て2年。増山課長は昭和60年に警察庁に入庁し、これまで大阪や神奈川、栃木、東京で主に警察無線や通信指令関係の仕事にたずさわってきました。警察の仕事は、駐在所もあればSPや国際緊急援助隊、また鑑識や情報通信などいろいろな仕事をしている人がいるのが魅力でこの道を選んだといっています。もちろん社会の秩序を維持して、市民の安心した生活を守るという役割に、言葉にできないくらいの充実感を感じているそうです。

また交通の仕事を通じて道民と触れ合う機会も多く、その屈託のないおおらかな気質が大好きとも。北海道は来てすぐに気に入って、自らもハンドルを握り道内各地をまわっています。実は2年連続「道の駅」のスタンプラリーに参加していて、連続完全制覇しているそうです。

最後に増山課長は「自然に囲まれたすばらしい環境で、道路も広くて整備されているのでスピードを出したくなる気持ちがフッとわいてくるのですが、くれぐれも安全運転で、事故のない快適なドライブを楽しんでもらいたと思います」と改めて交通安全を呼びかけていました。

(平成10年2月16日取材)



増山 芳邦 課長



庁舎